

探訪 北の風景 60

二十軒道路の桜並木 日高管内新ひだか町

青木和弘

新ひだか町は人口2万2600人（本年2月末現在）。海のすぐそばに山が迫り、比較的温暖で雪も少ない土地だ。隣の新冠町とともに、競走馬の産地である。

明治維新直後の1871年（明治4年）、徳島藩筆頭家老稲田家の旧家臣546人が元静内に上陸して開墾が始まった。

ここには古くからアイヌ民族の歴史があり、和人との間で交易がおこなわれていた。しかし、江戸幕府が成立すると、交易が松前藩の独占になって他藩との取引が禁じられたため、不利な値の相場を押しつけられるなど不満がつのり、1669

年（寛文9年）、静内のアイヌの首領シャクシャインが、蝦夷地一円に呼びかけて蜂起した。「シャクシャインの戦い」である。

稲田家旧家臣の集団移住の翌年、1872年（明治5年）、北海道開拓使長官の黒田清隆が、日高に棲息する野生馬に着目し、約2000頭を囲い込む、静内郡・新冠郡・沙流郡にまたがる7万ヘクタールにおよぶ広大な馬牧場を創設した。1877年に御雇外国人のエドウィン・ダンによって本格的に整備され「日高牧馬場」となり、1884年に宮内省所管の新冠牧馬場、1888年から新冠御料牧場となって、輓馬（ばんば）、軍馬の繁殖・育成、品種改良に貢献した。現在は、独立行政法人家畜改良センター新冠牧場になっている。

実はこの野生馬、江戸幕府が1799年（寛政11年）に日高地方南部に導入した60頭の南部馬が、山野に放牧した間に自然繁殖して増え、江戸末期に数千頭の大群になったものとされる。当時は、開墾した畑の作物を食い荒らすヤツカイもので、静内の学校には馬に乗って通う子のために、敷地内に馬をつなぐ柵も用意されていたというから、馬の調達に不自由しなかつたらしい。もともとは幕府が、1789年（寛政元年）のクナシリ・メナシの戦いなどアイヌと和人との抗争や、ロシアの南下に備えるため、使役を目的に導入し

た馬だったのだ。

そこで、二十間道路だが、1903年（明治36年）、新冠御料牧場を視察する皇族の「行啓道路」として、幅20間（約36メートル）、延長距離8キロメートルが造成されたものだ。

沿道の桜は、1916年（大正5年）から3年間かけて、当時の牧場職員が近隣の山野にあったエゾヤマザクラなどを移植したもの。5月には7キロメートルに渡る直線道路の両側に約2200本の桜が、一斉に開花する。エゾヤマザクラは色が濃く、満開時には葉も開き、並木の背後にはトドマツが防風林として植えられているので、牧草の緑と相まって、桜が一段と引き立ち圧巻である。

現在は「日本の道百選」や「さくら名所100選」、「北海道遺産」などにも選ばれ日本屈指の桜



JR静内駅の隣にある駅前交番の横に小さなチシマザクラが満開の花を付けていた。この桜は背丈が低く、根元から横に枝を伸ばす。花は可憐で満開になると花びらが白く変化する不思議な桜でもある



新ひだか町の二十間道路の見事な桜並木。訪ねたとき「しずない桜まつり」は終わっていたが、まだ花は残っていた



2015年の高波被害で線路の土砂が流出し、日高線は鶴川一様似間が運行不能になったまま放置されている。静内駅の線路は真っ赤にさび付いていた

の名所として多くの人々から親しまれ、毎年約20万人の花見客が訪れる。

新ひだか町内には、桜の名木がいろいろある。しずないさくらの会は、「南殿・血脈桜」（静内美幸町）や「大山桜」（静内ときわ町）、5月と11月の年2回咲く「十月桜」（静内美幸町）など日本を新ひだか町のホームページで紹介している。

名木には紹介されていない小さな木だが、静内の駅前交番の横に、私の好きなチシマザクラがあった。JR日高線は2015年の高波による土砂流出と、2016年の台風での橋桁流出で鶴川一様似間（11.6キロメートル）の運行不能が続いて廃線の危機にある。静内駅のレールは真っ赤にさび付いていた。何とか存続へ知恵を絞ってほしいものだ。